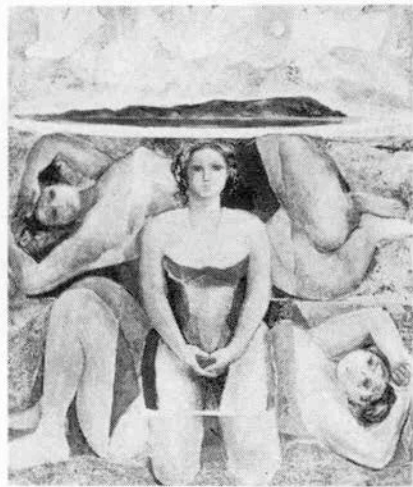


# 随想



絵/高崎研一郎「瀬戸内の伝想」

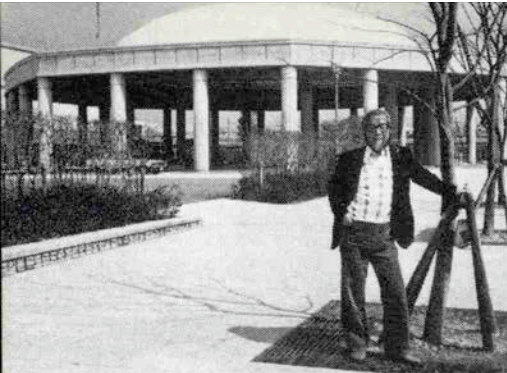
## 学園都市

高崎 研一郎

△神戸一紀会会員▽

去年の暮、大部分が田園・岳陵地帯からなっている郊外の学園都市駅の近くに移って来た。

久し振りに落着いた気分



学園都市・ユニバードーム前にて

なれたので、早春の午後、この周辺を散策してみたくなった。新しく芽を吹くらませた街の木々は、遠く、黒く横たわる伊川谷の山々に続いている。この山間は以前に住んでいた垂水の海辺よりも暖いのである。

学園都市駅は、アカデミックな近代建築で、陽の光があたり、まぶしい。駅の真横には、空間に広がりを持たせた、屋外円形場がある。丸いドームが、数十本の円柱で支えられている。ユニバードームと言いつ、その中央に立って話し合う声は、高く広い天井に反響して大きくひびく。この春は一周年になるので、い

ろんなコンサートや行事が催されている。横のグリーンコートでは子供達が走り回って遊んでいる。もう一つ、タウンシンボルとして、アメリカのフィラデルフィア市から贈られた、「フレンドシップ・ベル」がある。アメリカの独立の鐘「リバティ・ベル」の実物大のレプリカである。十時、十三時、十八時と、この街の静かで透明な空気の中に、鐘の音が広く鳴りひびき、アカデミックタウンの雰囲気を作りだしている。

キャンパススクエアには、四十幾つかの専門店があり、必需品が殆んど間に合う。賑わう買物客の中に混じって一巡してみるのも嬉しい。

そこを出て、五分も歩くと、全く様相も一変する。道の両側は広々とした畑や田んぼが広がっている。

丸々と大きくなったキャベツの列がたくさん並び、その中で畑仕事をしている人を見ると、何十年も前の光景を思い起してきた。この静かで、のどかな場所があることは、私にとってはかけがえのない

大切なものなのです。ユニバーシアード記念歩道橋の上に立ち、しばらく夕焼けを見る。バラ色に染まる綺麗な空である。下方に西神中央行きの下鉄、小寺トンネルの入口が見える。小寺大池が横にあり、周辺の山々から流れこんだ黄色い山水を貯えている。

伊川谷北高校、隣りには、新しく造られた公園が静かな高い丘にある。そこから眺める遙か彼方に、一筋の絹糸を引くように、白く細く海が見えた。淡路島は見えない。段々と日も沈み、あたりに立ちこめかけた白い霧は、芽を吹き始めた木々と、紅い絵具で溶き流したような夕焼け空を、覆いかくして行く。一昨年渡欧の際、立ち寄ったスイスでの一時の風情を、少し肌寒くなって来た帰り路、想い出した。こんな美しい、幻想的な自然のアトリエを持って幸せ者かもしれない。

### 神戸まつりと私

岡島 純

「ミニナト神戸」子の会員

今年もまた神戸市民が燃える神戸まつりがやってまいりました。



私と神戸まつりとのかわりあいは、今から九年前に遡ります。それまでは、単なる観客の一人にすぎなかったのですが、今やまったく逆の立場となってしまいました。

さて、その参加のきっかけとなったのは、昭和五十三年に神戸市民と港をつなぐ親しみの架け橋の役割として誕生した、船・港(それも神戸港)が大好きな人たちから構成された「ミニナト神戸」子の会」に入会したことによります。

会の結成当初から神戸まつりには、目立つ出し物で参加することで事務局・会員で毎年いろいろと凝った内容を考えています。しかしながら会の性格上、海に関わるものと制約されている為に、何かと頭を痛めております。記憶のある方もおられると思います

が、今までパレードに出して、非常に目立ったものとして、鷗のミコシ、帆船日本丸神戸誘致運動にかけての日本丸台

車と錨ミコシだと思っております。

制作はとにかく手造りをモットーにしており、会員メンバー、それも勤め人が多く、時間的制約がある中を、突貫工事の様相で自分自身でもあきれてしまうくらい熱心に参加し、本来の仕事をしている時ではないような——深夜労働まがいになる——こともありました。そのため当然のことながら、他の人が楽しく過しているゴールデンウィークは、この数年全くない状態が続いています。落ちついて考えると一体何のためにしているのか疑問に思うことがあり、最近では、今年こそ観客の立場になってやろうと思っているものの、またパレードに出してしまっています。やはり神戸に生まれ育った私には、どこか『まつり』に対して何か引きつけられるものがあるのでしょうか。

さて、今年には神戸港開港二〇年を迎え、いろいろな催し物が予定されていますが、神戸まつりを始めとして、最近市民の方々と、ややもすれば

ば離れたところで行なわれて  
いるような気がします。

今一度神戸まつりのあり方  
を考える時が来ているのでは  
ないでしょうか。

## 花に賭ける

山本 敏雄

△兵庫県文化協合理事長△



歳を重ねるということは、  
まこと目度いことに違いな  
いが今年は卯歳、年男にあた  
り、「還暦」という名で呼ば  
れると「正月や冥土の旅の一  
里塚」という芭蕉の句が妙に  
思い出される。と同時に、酷  
しくあわただしい時代をよく  
もまあ六十年生きてきたもの  
だと、じつと掌を見るこの頃  
である。

そんな人生の節目にと、こ  
の三月末、七回目の個展「小  
さな花描展」を開き、四年ぶ  
りの画文集「花旅人」を出版  
した。お蔭さまで花待ち月と  
いえる季節のせいもあって、  
花好きの方々が大勢訪ねてき  
て下さったのは望外の幸せで

あったが、その大方が「どう  
して花ばかり画くのか」「よ  
くまあそんな時間があるもの  
だ。仕事の方もやっているん  
だらうね」と疑われ苦笑させ  
られたものだ。

そもそも花を描く機会とな  
ったのは、昭和五十五年の新  
春。坂井知事が新年の職員挨拶  
の中で「今年は県政の裏方  
ともいえる夫人の蔭の苦労に  
対し、上司の方々は誕生日に  
感謝の手紙と共に花一輪を贈  
っては……」と提案されたこ  
とに始まる。

しかし、私は心をこめて贈  
る花一輪といえども、やがて  
色退せてしまいうだらうから、  
この際は四季折々の花を筆に  
して贈ってはと考え、早速新  
年会の席で公約してしまっ  
た。これは後になってひそか  
に後悔したのだが、たとえ小  
さな色紙といえども、毎月二  
十人にのぼる夫人方に花の絵  
を画くことは至難ともいえる  
技であった。だから好きなマ  
ージャンや酒も控えざるを得  
なくなり、付き合いが悪くな  
ったと同僚から責められたも  
のである。

でもこの約束が、いまにして  
思えば私の人生を大きく変え  
たようだ。もとより好きな  
花、好きな絵の道ではあった  
が、この頃より花の心の中に  
私なりの生き方、喜びを発見  
したように思える。

先日、書家岡村雄風翁から  
戴いた色紙に「小さきは小さ  
きままに花つけぬ野辺の小草  
にいのちあふるる」とあっ  
た。

誰しも少年の頃なら冒険に  
も似た夢や希望が心かき立て  
たものだが、還暦ともなる  
と、たとえ老骨にムチ打とう  
ともその可能性には限りが見  
える。だとすると、小さきは  
小さきままに、精いっぱい明  
日に向けて人生の華を咲かせ  
たいものである。花のいのち  
に重ねる人間模様——その美  
しくもきびしい人生に私は明  
日を賭けたいと願っている。



画文集「花旅人」山本敏雄著  
兵庫県文化協会発行定価2600円

随想

旅のかたち

△ 9 ▽

# 仮の宿

安水稔和

絵／中西勝

住所録を見ると次々と居所を移す人がいる。元の住所に棒線を引いて消し、その横に新住所を書き加える。さらに棒線を引いて消して新々住所を書き改める。何度も訂正するうちに欄外にはみ出してしまい欄外余白からもはみ出して上の余白にや々と書きこんだり。その逆に二十年、三十年そのままの人もいる。一部書き加えてあるが、町名、地番の変更で転居したわけではない人もいる。

私はといえば、須磨の家を空襲で焼かれて母の生地へ逃れ、戦後やっと戻ってきて長田に住みついた。以来ずっと長田に住んでいる。町名も変わらない。番地も変わらない。一九四九年からずっと変わらない。だから、このたびの半年間の垂水での仮住まいは大げさにいえば居所に関して生涯二度目の大事ということになる。多分もうこの地を動くことはないだろう。

去年の秋、仮の宿に入ってまず駅への道を確認した。坂を下って南へ歩くと崖にぶつかる。湾曲した不ぞろいの長い石段を登りつめると、ブロック塀の道がつづく。左に駐車場、右に寺、左に古めかしい邸宅、つづいてマンション、右に三角屋

根の教会。車の疾走する狭い道を斜めに渡って新築の家のまえを折れると左手に公園。道の突きあたり空が拡がっている。

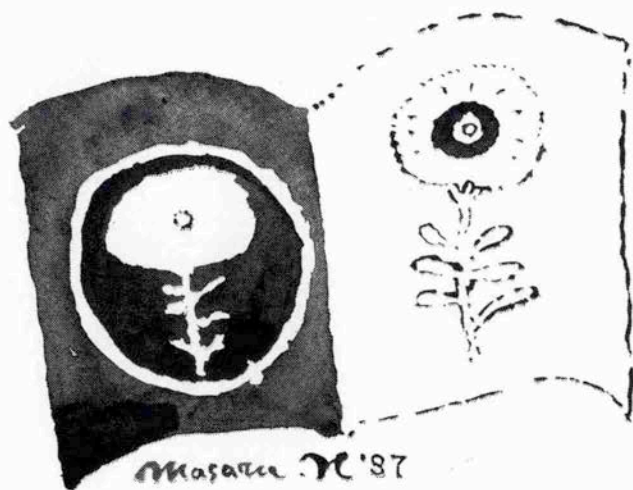
歩くにつれて空のしたに海があらわれて目の下に広がる。海を見下す高い崖のうえに立つと、足の下を電車が走る。右へ行くとポストがあって新聞自販機があって風に吹かれて立っている。電話ボックスがあつて駅への降り口が開いている。

次は喫茶店探し。といってもコーヒーが飲みたいたいわけではない。原稿を書く場所がほしいからだ。仮の宿が手狭で机を置くスペースがないからではなくて、それもあるが、もともと私には外で書く癖がある。全部外でというのではない。家にもって書くこともあるが、外で書くことも多い。仮設書斎というべきか、移動仕事場というべきか、そんな場所を常日ごろ心がけて探している。

うす暗い店は駄目だが、ともに陽の当るのも困る。大切なのは机の高さで、低い机は駄目。それと机に合った椅子。書きものができないとその店に入る意味がないわけで。それから何時間でも

いやな顔されずに一人で座っていられるというのも大切な条件である。こんな勝手な条件をみたす店はすくない。書きもののできる店、本の読める店、ほんやりと座っていられる店。それでも探せばあるもので。

国際会館のエメラルドパーラー。高い天井、全面ガラスの窓、その北窓の明るい静かな席、びっ



たりの高さのゆったりとした机と椅子、いつもまばらな客。あそこですいぶん書いた。本の数冊、ドラマ数本。ある夏など、風呂敷に原稿用紙と資料を包んで毎日数時間十日通って一時間物のラジオドラマを書きあげたこともあった。すらりと背の高い美しい人がそっと日本茶を出してくれた。二十数年前の話。今はどうなっていることか。

元町駅西口のあの店は馬券の話が飛び交いゴキブリが出た。詩集を十冊、二十冊かついでいって読み通し、ある雑誌の詩集月評を一年間そこで書きつづけた。ある日、シャッターが降りていて、降りっぱなしで、シャッターあがったら本屋になっていた。

三宮駅北側のあの店は本を読んだりほんやりしたりするのに適していたが、客が増えだしてどんどん増えて席待ちをするほどになって本が読めなくなつた。このところ重宝している店は三宮に三軒、元町に一軒、長田に一軒ある。

垂水での喫茶店探しは垂水駅前本通から東垂水の丘のうえまで十三軒入って出て十四軒目、仮の宿から歩いて三分のところのいい店が見つかった。夫婦でやっているコーヒー&グリルの店。せつせと通ってせつせと原稿書いていると日本茶が出た。

春になって桜が咲いて泉ヶ丘の仮の宿に別れを告げて、高い崖に別れを告げて、仮・仮設書齋ケルンにも別れを告げて元の古果の長田の家に戻ってきた。ところで、書きものをしてしていると日本茶の出てくる喫茶店にどこかでまためぐりあえるだろうか。

# ぼくがいちばんよく食べた頃の話

文・玉村豊男(エッセイスト) 絵・石阪春生

このあいだ、食いしん坊の友人と、いったいいつくらいのおときがいちばん激しい食欲があったらろうか、という思い出話になった。もちろんいまでもその男と私は、同世代のふつうの人間よりはずつと健啖であるが、さすがに若い頃とくらべると食べる量は落ちている。

食欲のピークには個人差があるようで、一般的には高校・大学の頃がもっともよく食べる時期のようだが、私の場合、食事の量を示すカーブはその後を上昇して、二十代の後半で頂点に到達したように思われる。私が神戸を初めて訪ねたのは、幸か不幸か、ちょうどその時期の、二十八歳の秋であった。

私は、ある小さなPR新聞の、編集記者をやっていた。神戸へはその仕事で、食べ歩きの記事をつくるため取材に来たのである。食べもののほかにも街やファッションなどの特集企画があつて取材は数人でチームを組んだのだが、食担当の私は食べ歩きの記事には時間がかかる、食べもしないでいい加減な記事は書けない、と編集長を説得し、みんなより一週間近くも早く神戸へ乗り込んで、ひとりで連日四軒も五軒もレストランをまわった。

たとえば、午前中に『青辰』でアナゴ寿司を食べ、昼は『群愛飯店』。夕方『愛園』で青ガニ炒

めで老酒を一杯やったあと『ドンナロイヤ』でイタリア料理。夜は『アカデミー』で酒。

あるいは、朝『東亜食堂』で粥を食べ、昼前に『老祥記』で豚まん、昼過ぎ『キングスアームス』でホットローストビーフ・サンドイッチ、早目の夕食は『藤はら』の天ぷらとし、夜食の『蛸の壺』のタコ焼き、といった具合。もちろんそのあいだに、目ぼしい喫茶店をまわってケーキも試食した。

いま思い出しても、本当に楽しい仕事だった。別に、神戸の食べものや全店をまわってガイドブックをつくらうというのではない。コンディションをととのえてシェフと「勝負」し、三つ星だの二つ星だのと点をつけようというわけでもない。ただ、おもしろい店へ行行って好きなものを食べ、そのうちから目ぼしい店を数軒紹介すればいい、という、いとも気楽な企画である。もちろん、この企画は私自身が立て、持ち前の大声で編集会議を強引に通したのだ。その頃の私は体重八十四キロ、スリーサイズは上から一〇九・九六・一一〇というほぼメートルの円筒形という体型だったから、たいがいの企画はその迫力でパスしたのだった。

そんなふうにしてほしい神戸の食べもの屋地図が頭と腹に入った頃、あとの取材記者たちが神

戸にやってきた。

早速、ミニ編集会議を開く。どうせなら食事を兼ねて、ということ、編集会議の場所はギリシヤ料理店『ギリシヤ・ヴィレッジ』とした。

この日は、われながら本当によく食べたものだと思ふ。

朝と昼は何を食べたか忘れたが、午後二時過ぎに『トアロード・デリカテッセン』でスモーク・サーモンのサンドイッチを食べたことは覚えていゝる。で、六時半からギリシヤ料理のフルコース。数品の前菜とサラダを食べ、ムサカを食べ、ワインを飲み、デザートにアイスクリームを食べた。もちろん、それだけならどうということはない。自分でも凄うと思うのはその後である。ギリシヤ料理を食べながらの編集会議を二時間



ハルシヤカ

ほどで終えた私は、さあこれからどこかへ飲みに行こう、という仲間と別れて、ひとり暗い夜道をみんなと反対の方向へ歩き出した。もう一軒、取材の予定が残っていたのだ。

私が歩いていったのは、ステーキの『麤皮』<sup>あらがわ</sup>であった。当時気鋭のレストランとして売出し中の店である。たしか歩いて十分かそこらだったと思う。私はあまり空腹でないの、(アタリマエだ)、軽めに、といって二五〇グラムのステーキを注文した。

すると店の主人は、焼けるまでに少し時間がかりますから何か前菜を、といい、一皿のスパゲッティ( )を持ってきた。断ろうと思ったが、店からのサービスだというし、見るとおいしそうなので、ペロリと食べてしまった。かなりの量だった。続いてステーキ。そしてサラダ。最後に、またアイスクリーム。結局私はその晩、まともなディナーを二回続けて食べたことになるのだが、それでも特別苦しいほどの満腹を覚えることもなく、さわやかな気分ですてルへ帰っていったのである。

なんでもおいしくたくさん食べられるということとは、実に幸福なことであるには違いない。しかし、そのおかげで、いまだに神戸という食べ物と食べもの屋のことしかイメージにのぼってこないのは、神戸という街の正しい理解のために良いことなのか悪いことなのか、よくわからない気がする。



▲筆者紹介▼

一九四五年東京生まれ。六八年パリ大学言語学研究所留学。七一年東京大学弘文科を卒業。観光案内、翻訳業などを経て文筆生活に入る。主な著書に『パリ旅の雑学ノート』『料理の四面体』等。

# 神戸と モーツァルト

〈神戸商船大学教授〉 井上 和雄



つい先日、逢坂太郎と神戸一郎に会う事があって、面白い会話に出会ったのでちょっと御紹介したい。二人とも随分熱中してやり出したのである。

「大体、神戸の奴は気取ってやがってどうも気に食わん。あんなどこ、住む気にならんわ」と太郎が言うのである。もちろん一郎の方もこれを聞いて引きさがるわけにはいかない。「そやけど、僕に言わしたら、あの大阪ちゅう街は猥雑で、がさつで、山も木もない。どだい人間の住む所やないやんか」。

「いや、お前はな、あの猥雑さが分らんさかい人生ちゆうもんが分らんや。人間、スマートに生きようと思ても、生き切れるもんやあらへん。そやつたら、猥雑に生きた方がよっぽど生き心地がええで」。

「何いうとんねん。あれが生き心地ええというもんか？ 人間同志ベタバタひっ付きよって、中におる奴はええかもしれんけど、他所から転動したもんには、あれは排他的な浪花節だけやんか。ほかの人間は強烈な疎外感を味わわされとんの、氣いつかんのか」。

「それそうかもしれん。東京もんが来よったら、言葉きいてるだけで、けつたいくそ悪なるもんなあ。そやけど僕等に言わせたら、東京の奴のあの気取りやスマートさが気に食わんのや。あいつ等が日本の道、誤まらせよつたんや。糞真面目で恰好つける奴いうのは、ものごと、上っ面しか見てへんのに、本気でその上っ面のために他人を掻きまわしよる。ああいう奴等から文化なん

て、生れたためしはないんや。」

「ちょっと待てよ。大阪の奴が文化なんちゆう言葉使うのん聞いたら、チャンチャラおかしいわ。一体大阪に文化なんてあるんかいな。大阪に古いもんある言うけど、上方歌舞伎も文楽も、浪花節もみんな潰してもうて、そうか言うて、東京みたいに新しいもんがどんどん出て来てるわけでもあらへん」。

「辛いこと言いよるな。そやけどお前も、文化ちゆうもんを狭う捉えすぎとるぞ。文化なんちゆうもんは、音楽会や絵の展覧会の多さで測るもんと違うんやで。文化ちゆう言葉がどうもチャラチャラしとる気に食わん言葉やけど、とにかく文化があるいう事は、音楽会や展覧会が多い事とちがうねん。みんなが一人々々、自分の身の長に合うた生活をする言うこつちや」。

「うん。それは認めてもええ。そやけど身の長に合うた生活いうても、大阪人がそれでほんまにやとるとるんかいな。ゼニのためやつたら街の景観なんかどうなつても知った事やない、というセンスで、大阪の街ムチャクチャになつとるやんか」。

「痛いことばっかり言いよるな。そや、その通りや。そやけど僕が言いたいのは、お前らみたいに、わけのわからん文化々々いう言葉ふりまわして、スマートで恰好ええ事ばかり目え向けてたら、それこそ自分の足元までええ加減なものになる言うこつちや。異人館や、南京街や、いうてそんなもん誇りにしてるようでは、しょう



もない観光都市になるだけで、住んでる人の生活の豊かさとの関係もない事になってしまっただけや。

「お前も、ええ加減痛烈やな。僕も思ったことあるねん。神戸の人間も恰好ばっかり気い遣うてたら、昔屋みたいななれへんか思うて。あの昔屋の言葉知つとうやろ。関西やいうのに東京弁使いくさって。東京の奴が東京弁使うのは当然や。そやけど関西の奴が使うちゅうのは、全然意味が違うて来る。あいつら気取りの典型やねん。あそこの街で再開発や何やいうてみても、ほんとの文化生れへんで。人間の一番奥にあるもん殺すことで恰好つけても、何の豊かさも生れへんのかや。」

「あんたも分ってるやん。それを早よう言わんかい。僕もあんたが好きやさかい言うねんけど、神戸はどっか昔屋と共通しとる。文化づいとるところが、要するに気に食わんのや。」

「わかっとる、わかっとる。すやけど昔屋とちがう所もわかかってほしいねん。神戸はカルチャーショックとしてのハイカラ趣味を生きとるんや。これは明治以来の日



著者むのたをブルサンアンと仲間

本がカルチャーショックを受けたその象徴を生きとるわけや。そこに神戸の若々しさを認めてもらわんと、わいら立つ瀬ないやんか。

「うまいこと言います。そういう事なら神

戸のハイカラ趣味も認めたつてもええけど、去年、神戸でえらいモーツアルトをはやらしとったな。あれ一体何や。あれもカルチャーショックの部類か。」

「そう一刀両断に来んといえや。お前にかかったら、何やみんなチャラチャラして見えて来るやん。そやけどモーツアルトいう奴は、ごっついインターナショナルな男やろ。あいつは大坂みたいなザルツブルクの田舎の浪花節がたまらんかった男やで……。」

「ちよつと待てよ。大阪の人間にはモーツアルトが分らんようなこと言うけど、ここにおる井上がこないだ音楽之友社から『モーツアルト 心の軌跡』ちゅう本読んだか。あれ読んでみい。浪花の商売人が、東京のチャラチャラした奴よりよっぽどモーツアルトを分つとる事がよう書いたある。あの本で知ったけど、モーツアルトはな、『僕の願いは、名誉と名声とお金を得ることです』言うとるんや。こら大阪の生活人のセンスや。あの生なましい生活感情がないと芸術は生れんのかや。」

「そら初耳や。そやけどそのモーツアルトも旅せんとおれんかったわけやろ。つまりカルチャーショックを受けに出て行きよる。それは神戸の開かれたセンスと同じやないのんか。」

この会話、まだまだ続いたのだが、残念乍らもう紙数がないのでここまでしか紹介できない。この二人、実をいうと僕が床についたとき、僕の脳味噌から飛び出して来て、枕元でうるさくやりだしたのである。『神戸っ子』にお前等の会話を載せてやるという約束で、やつと静かになったのだが、全部のせてやれないのがまことに残念である。かく言う私めは、大学、職場ともに神戸なのだ、ずつと大阪住いという人間でございます。

△筆者紹介△

昭和十四年生れ。神戸大学経済学部卒。神戸商船大学経済学教授。神戸モーツアルトクラブ会員。

著書『モーツアルト 心の軌跡——弦楽四重奏が語るその生涯——』(音楽之友社)。

## 名作のある風景

〈1〉吉村由美 〈エッセイスト〉

# トアロードから海岸通り

陳舜臣氏の「枯葉の根」は、昭和三十六年江戸川乱歩賞をうけた。他に類をみない群をぬいた作品として評価され、その作家的出発を遂げさせた処女作である。

翌三十七年、「割れる」「三色の家」「弓の部屋」など、推理小説家としての势力的な仕事が始まることとなる。その後、四十三年「青玉獅子香炉」で直木賞受賞。四十五年「玉領よふたたび」と「孔雀の道」で推理作家協会賞、五十一年「敦煌の旅」で大佛次郎賞を受けている。陳舜臣の作家としての領域は、すでに歴史小説、史伝、紀行、エッセーと広がり、それぞれに優れた文学的水準を示してきたといえるだろう。

陳舜臣は、大正十三年神戸で生まれた。幼年時には元町六丁目あたりに住んだという。十歳から二十歳にかけて海岸通五丁目に住み、そのエッセー「二つの海」に書いているように「中突堤のやや西、国産浜のすぐ前である。人間形成期に、毎日港をながめて暮した」という文章からも、神戸の海岸通りと港が、彼の青春時代の風景

であったと推察される。その風景は、むしろ感傷的な、

メロドラマの舞台に描かれるセンチメンタリズムとしてはなく、もしも風景にロマンを感じるすべし、きわめて男性的な、男の世界における仕事のなかに秘められたものであっただろう。「港の雰囲気は、完全に男性的なものである。そこは仕事場なのだ。よけいなものはない、といったかんじがする。貿易の仕事からしばらくはなれているが、港へ行くと筆者はいまでも胸のときめきをおぼえる」と彼はエッセーのなかに書きとめている。港でかんじる胸のときめきこそ、はてしなく外界へ夢を広げた、男のロマンの照射であるにちがいない。

昭和十八年、陳舜臣氏は大阪外国語大学インド語科を卒業し、母校の西南アジア研究所の助手として勤めはじめた。しかし昭和二十年三月十四日の大阪大空襲で母校は焼け、研究室にあった資料も焼失、虚脱状態になりながら、わずかに焼けのこった大学の書庫に行き、二人の教授と一人の研究員と彼の四人で、中国とイランなどの関係を言語学的に研究する会合を、戦時下のもっとも暗いさなかに続けてゆくのだ。またその研究とは別に一人、中国古代文明に関する論文を読んだりしながら、人が人として生きることが許さぬ時のすぎ去るのを、じつと「待つ」のである。

このころ陳舜臣氏の家は住居だけを北野町一丁目に移していた。昭和二十年三月十六日夜の爆撃によって神戸の町は炎につつまれ、海岸通りの家も焼け崩れる。その焼け跡にたち「自分が生まれ、育ったこの神戸を、そのときほどいとおしく思ったことはない」という思いが、

旧居留地界隈を歩く筆者<ノザワの異人館>



今も華僑の貿易商が多い海岸通り界限

さまざまなものへの喪失感とともに彼の心をおおいはじめたのだ。神戸以外に行きどころのない彼の一家は、空襲の難をさけて、しばらく垂水の福田川べりに引越すのだが、三月につづいて六月五日の大空襲によって、神戸市内のほとんどは焦土と化し、余燼のくすぶるなかを、彼は叔母や知人のゆくえをさがし求めて歩き、中山手一丁目から生田神社にかけて、いやというほど黒く焼け焦げた死体を見る。「神戸の町の滅亡は、筆者には大きなショックだった。二十年をこの町だけにつながつて生きてきたのだ。ほかには住めそうもないし、まな行き場もなかった。神戸の復活を祈るほかはなかったのである」という文章は、陳舜臣にとって神戸という町が、生れた故郷であり、一切の生活感につながる場所であり、ひとつの人生の風景を描かしめる町であった。彼にとって神戸は「いとおしく」愛すべきものとして、その後、作品の舞台に登場してくるのである。

陶展文は、陳舜臣が「枯草の根」いらい登場させる、ふしぎに実在感のある人物だ。海岸通りにたつ東南ビル

の地下で、中華料理「桃源亭」を経営し北野町にある自宅の庭で、父から学んだ拳法を体操がわりに毎朝練習したりする。さらに漢方医としても少しは知られ、知人たちのために漢方薬の処方を書いてやったりしている、という設定である。

陶展文の人物創造がすぐれているのは、その悠々せまらざる人生態度にある。名利私欲にガツガツしない余裕と、広く静かな寛容の心、彼の積神の内部にあるのは、人間への愛である。それは民族の血をこえた、人間存在そのものへの暖かさだといっている。憎悪や羨望や劣等感などという、時に愚かしく小心な人々の行為を、人間の生きる姿の悲しさとして彼は静かに見つめるのだ。しかし落着いて穏やかな陶展文の性格のなかに、鋭い観察の注意ぶかさと、物事の正邪を的確に判断してゆく知性を、読む者は感じさせられる。それは陳舜臣が創造しえた、ひとつの聡明な風格をもつ人物像であるといえるだろう。

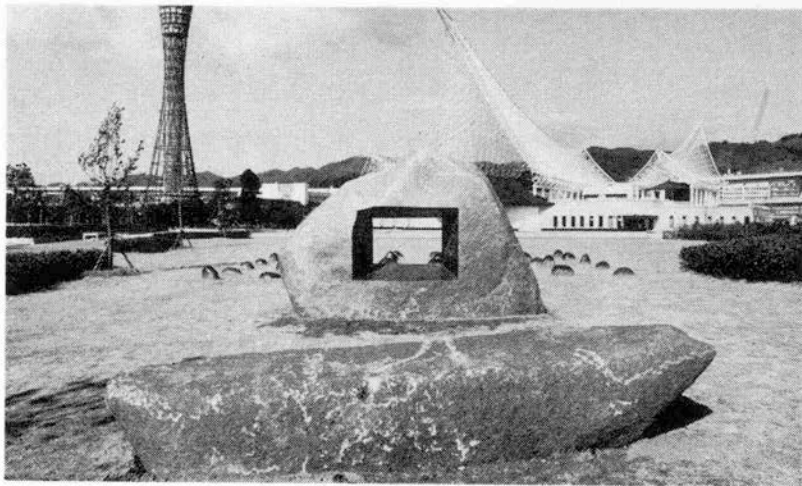
陶展文のところへ拳法を習いに中央新聞の記者、人島和彦は、自らの社会的榮達よりも、一切の悪徳不正を許せぬ青年らしい熱気と行動力をもつ人柄だ。陶展文の穏やかな暖かさとは小島記者の純粹な行動性は、静にして動という作品展開におけるバランスをたもちながら、小島青年のなかに、われわれは、陶展文の若き日の姿を、青春の日の想いとして重ねあわせることも出来るのではないだろうか。

陳舜臣は、その簡潔な文体のなかに、実にさりげなく、陶展文という人物像の実在感を浮きたせる場所として、神戸の海岸通りを、トリアロードの坂道を描いてゆく。作品「枯草の根」は、氏の内部に定着した神戸という町を、彼自身の心の風景にしながら、その深い知性によって創造せしめられた、作品的才華だといえるのであろう。

筆者紹介／神戸生れ。エッセイスト。「魅せられし時のために」「国語力をつける法」「やがて薔薇咲く季節」などの著書がある。大学受験予備校ジュニア・カレッジオーナー／神戸市灘区山田町2ノ5ノ15 六甲パールハイツ302 電話番号 078-821-4666

□特集／メリケン・シアター完成記念

# 時代を超えた新たな感動が甦る……。



石の一つ一つに国内外の男優女優の名前が刻まれている。

神戸事始の一つに映画がある。海外から映画が日本へ上陸した第一地点が神戸。これを記念して、四月二十九日に完成オープンしたメリケンパークに「メリケン・シアター（映画発祥の地を記念する碑）」が、淀川長治選、環境造形Q制作により一般にお目見えした。

この機会に小誌は各界の方々へ①映画記念碑へのメッセージ②今までにご覧になった映画の中で最も心に残っているワンシーンは？との内容でアンケートをお願いしたが、次の方々からご回答をいただいた。

△編集部▽

★神戸と映画を世界にPR

淀川 長治

△映画評論家▽



①神戸と活動写真の関係がこれで世界じゅうによくわかったと思います。そしてまたこの記念碑のデザインが神戸の個性をあざやかに香らせました。

②これは書きつくせませんので、ほんの僅かにしぼります。「駅馬車」(ジョン・フォード作)の走る馬車とそれを追うインディアンのごい撮影シーン。「散り行

く花」(D・W・グリフィス作)のバーセルメスの中国人とリリアン・ギッシュの白人少女の愛のシーン「グリード」(ストロハイム作)のラスト・シーンの砂漠。 「街の灯」(チャップリン作)の花屋での二人の再会のラスト・シーン。「狂恋の女師匠」(溝口作品)のフースト・シーンとなってゆくタイトル・バック。

★パリジャンの「粹」



長島 隆

〈神戸地下街劇社社長〉

1.ステージストーン、スクリーンストーン、スターストーン。このミニメントの前に立つと空想は果てもなく広がる。山高帽ダ靴ステッキのトレードマークをつけて今、チャップリンが石のステージに現れたら……。神戸っ子たちはここを舞台に何を表現してゆくだろうか。環境造形Qは、映画を愛する人々の願いを受けとめて、未来に向けて夢を紡ぎだす装置を、眺望絶佳のメリケンパークに誕生させた。

2.ジャン・ギャバン。スクリーンで初対面るとき私は14歳、彼は30代の半ば。白き処女地、地の果てをゆく、望郷、霧の波止場etc。暗い翳をひきづって、表街道を歩けなかった男たち。汁くさい男っばいという姿に、パリジャンの「粹」が漂っていた。

★手錠のジャン・ギャバン



東岡 茂

〈神戸興行協会常務理事・事務局長〉

(一)、カウベに生れこうべに育ち神戸で映画生活五十年、ここに映画の碑が建つ、このよるこびは誰よりも何よりも生涯無上の感激である。

映画が渡来して、以来九十年が過ぎ一世紀を超えても、この「碑」が永劫に在る限り、映画文化の素晴らしさが人々の心に残像を刻み、そしてたくましく未来を想像していくであろう。

(二)、「望郷」

手錠のジャン・ギャバンがラストで一度二度そして三度、愛人の名前を絶叫する港の別離出航合図の凄まじい霧笛音にその叫ぶ声がダブって

船上の愛人は思わず耳を覆う。(何たる皮肉)ギャングが始めてみせる涙、愛人への熱い想いが頬をふるわせ、無念の口唇をかむアップ、船影はゆっくり流れるように霧の中を幻のごとく遠去かり消えて行くーそして「FIN」。

★シェーン／カムバック／



三浦 幸衛

〈劇モリドリン代表取締役〉

すばらしい神戸の街にまた一つの新しい顔が生まれました。

メリケンパークに映画記念碑が出来たことです。神戸は映画発祥の地でもあるとか。今思えば、今日のファッショ

ン都市神戸・文化都市神戸への躍進ぶりは、当然約束された神戸の今日あるべき姿のように思われます。ピバ神戸

私の青春時代の娯楽は映画鑑賞に代表されておりました中でもアメリカ映画の名作といわれた「シェーン」のラストシーン、「シェーン／カムバック」馬で去って行くアランラッド扮するシェーンを呼び戻そうとするジョーイ少年の

叫び声が、白く雪をかぶった山々にこだまして、余韻が残る言葉が、甘く美しい主題曲のメロディーとともに、今でも忘れられなく鮮明に脳裏に焼きついて残っております。

★明日に望みを託して



依田 和恵  
△依田建設社長△

女学校の一、二年の頃、父の本箱から手当り次第に引っぱり出して読んだ本の中の一つに「風と共に去りぬ」がありました。全編大きな感動を受けましたが、特にラストにスカーレットが、自分でも気付かなかったレットへの愛をあれ程強く訴えたのに去られてしまった後姿に泣きました。戦後この映画に魅せられて何度も観に行きました。「そうだ自分にはタラがある」と立上ったスカーレットの強さにひかれたのは私自身一生懸命生活と戦っていたからでしょう。か。三度目はテレビで感動を新たにしました。「明日に望みを託して」とタラの空に向かうスカーレットの後姿に再びレットに逢えるにちが

いないと。

今では贈り物のビデオテープで思い出を大切にしています。私も明日に望みを託して。

★不滅の思いを残して欲しい



堀 郁子  
△シャンソン歌手△

①戦後の日本にとって、私達の楽しみは、テレビなどない時代だったので、足しげく映画館に通いました。神戸っ子の私にとって映画発祥の地に育ったことを大いに誇りに思っています。様々な映画と青春時代は切っても切れない、映画のシーンや主題歌と共に思い出につながります。記念碑が完成した今日、また神戸に新名所が出来たことを心から喜び、おしめない拍手を送ります。

②考えて見ると今までにどれほど映画を見て来たか、懐しい思い出と共に忘れられない映画がいくつか有ります。先ず、私の人生をシャンソンの世界にひき込んだと思われる数々のフランス映画、美しいフランス語で愛を語り歌う様な流れの言葉に魅せられた、

「我が青春のマリアンヌ」の主人公ヴァンサンソンのギター弾き語り、導入の語り、「天井桟敷の人々」のアルレットイとジャンルイパローの月の光の中でのラブシーン、この二つの映画が今もはっきりと私の胸によみがえります。

今はビデオで、ミュージカルとか、古いフランス映画を見えています。「カサブランカ」とか「望郷」など何度見てもあきのこない素晴らしい映画だと思います。

現実なきびしかった時代に生きて、夢をふくらませ、未来の精神形成に非常に大きな役割を持った映画の世界、私にとって、今もなお素晴らしいあのシーンこのシーンがよみがえって心を満してくれませ。今後また後世に残る様な映画が出現することを期待します。映画は人の心に不滅の思い出を残すことでしょ。

★駅・駅・駅……



北村 光  
△脚本プロダクション△

古くは「望郷」カサブラン



カ」など脳裡に浮かぶ名作は、今流行のレトロ懐古調の部分として、三十年近い頃の「終着駅」旅情「昼下りの情事」その他映画と音楽の結びつきが、我々旧人類に属する者にとって、情報としてラジオ時代に画像を鮮明に記憶しています。三十年近く経った現在までも解説者水野晴郎氏ではないけれど「映画って本当に素晴らしいですね」が領けます。ラストシーンが駅の映画で「終着駅」など、短時間の出来事がストーリーとしてその当時長い一巻の映画物語として展開出来たのか、字幕の完が出、スクリーンが白くなりカーテンが降りた後も暗いプラットホームでの別離とそして音楽の余韻が。また明るい別離として「旅情」。

駅の最先端までの追走と音楽とのハーモニー。チェロの奏でるホームで別れが新しき出会いになる「昼下りの情事」など数え切れるものではありません。国鉄が新しくJRと名称を変更した四月、新しい駅での出会い、また別離が出来、素晴らしい音楽と映像の出会いを楽しみにしております

★神戸の誇りが、また一つ



長澤 昭  
△大丸神戸店長

①

「映画発祥の記念碑」完成  
おめでとうございます。

神戸が映画発祥の地とは、  
迂闊にも今まで知りませんでした。

神戸は日本の洋風生活の原点の地として、我々神戸っ子は、異人館や旧居留地の古い建物を大事にしてきましたが若い日に情熱を傾けた映画もこの神戸で生まれ、今回、その記念碑が建つというのは、我々の誇りが又ひとつ、増えることで素晴らしいことです。

しかも、それが、最も神戸らしいメリケン波止場に隣接した、メリケンパークに開港一〇〇年を記念して建つという、時も良し、場所も良しということですよ。

心からお祝い申し上げます。

② 映画名「シエーン」

シーン「最後に子供が、シエーンを呼ぶシーン」

★神戸映画フェスティバルを



三村 照雄  
△シネマガイド代表

①全国の映画ファンよ、神戸に立ち寄られたらメリケンパークに来てほしい。シネマシアター(記念碑)を眺めるのもよし、ちょっと気取って写真を写すのもよし、シネマステージで映画の「想い」を語らうのもよしetc工夫をこらさずど色々な遊びが出来る、ちょっと贅沢な映画の遊び場だ。映画に酔いしれるには最高のロケーションである——。

でもこのままでは、いささか役不足。シネマステージがあるのだから、そこに日本の、外国の監督・俳優・プロデューサーに上がってもらおうではないか。

②12月1日(映画の日)、神戸の映画ファンの手で、毎年「神戸映画フェスティバル」を。神戸の映画ファンの「粋」さで、ユニークな映画イベントを。シネマステージが映画文化の発信源である。

★映画記念碑キャンペーンを



田中 千佳  
△作家

①「映画記念碑」ができるのは知っていますが、あまり一般の方は神戸で、日本初めての映画が上映されたことを知らないようですね。

ですから、それについてのキャンペーンをして、一般の方々にも深く認識して頂けるようにするべきだと思います  
それは、例えば、アメリカのチャイニーズシアターのように、スターの字型を残すとか、大スターを呼んで、「記念碑」で、ショーを行ったり、色々考えたなら、楽しいですね  
②終戦後、古いフランス映画が、たくさん上陸して、神戸の場末の映画館で、むさぼるようにして観ました。

それらの中で、特に印象的なのは「舞踏会の手帳」という作品で、中でも、ダンスパーティーのシーンが、斜めの構図で撮られ、ワルツの曲と共に、主人公の不安感を現わしている、今もよく記憶に残っています。





★ぜびメリケンパークへ



角本 稔

△港めぐり観光船船長△

①神戸で初めて、外国製の映画が上映されたことで、欧米の文化に触れた。それが上陸したのが、メリケン波止場ですが、その近くに「映画記念碑」が建てられることは、神戸としていいことだし、港としても、誠に意義があって、喜ばしいことです。皆さんもぜひ、機会あることに訪れて、刻々と変化する港の風景を、スクリーンストーンから眺めて下さい。

②「ウェストサイド物語」  
その音楽と共に、画面が印象に残っている。特に、対立する2つのグループが、お互いに挑発しあっていくシーンが、想い出深い。

★脳裡に残るからゆきさん



岡田 美代

△演出家△

①映画記念碑について  
一九八七年という今の、まさに神戸らしいアイデアのあ

るモニュメントだと思えます  
歴史というものが、いかに  
はかなく忘れ去られていくも  
のか、しみじみと考えさせら  
れています。五千年の歴史を  
残すエジプトでも、二千年の  
歴史を残す中国でも、今、私  
達の目の前にあってそれを感  
じさせてくれるものは、ピラ  
ミッドそして万里の長城なの  
です。

メリケン波止場の海の輝き  
と、空を行く雲の流れを、あ  
の石のスクリーンが、いつま  
でも映し出してくれる……。  
本当に素敵な記念碑です。

## ②サンダカン8番館

昨年、思いがけずタイ、シ  
ンガポールを訪ね、現地に残  
っているからゆきさんの墓石  
を見ました。日本へ背を向け  
て、小さな肩を落したように  
並んで眠っているその墓地は  
ムンムンと湿度の高い緑陰に  
ありました。

虫の這いまわる廃屋のよう  
な家。まっくろに日焼けした  
顔、骨ばかりのように削げた  
肩の老婆・田中絹代が、東京  
から来た若い女・栗原小巻に、  
童女のような笑顔で語って聞

かせる昔話……。あの用中絹代  
の笑顔と語り口調。家の外の  
熱気を帯びた陽光と緑が、現  
実に重なって、私はその墓地  
に長くどどまることができま  
せんでした。

映画は、心の中にいつまで  
も生きているのですね。

## ★素晴らしい造形！



武田 則明  
△建築家△

①まず何と言っても、公共の  
機関が作ったのではなく、一  
般の人々の市民団体が作った  
ことが、とても良いですね。

そして、海洋博物館に脚を  
運ばれた方なら分ると思いま  
すが、南側の広い公園が、あ  
の碑が全体を引き締める、良  
いアクセントになっています

また、碑そのものの、全体  
のイメージが良いですね。素  
晴らしい造形物だと思います  
よ。そして、ストーン一つ一  
つに、俳優の名前が入ってい  
るのも良い。こう、イメージ  
が沸き上がってきますから。

②何と言っても「ジャイアン  
ツ」どのシーンも、ストーリ  
ーも好きですが、敢えて言う

ならば、J・ディーンが、狭  
い自分の土地を掘って、石油  
が吹き出してくるシーンが印  
象に残っていますね。

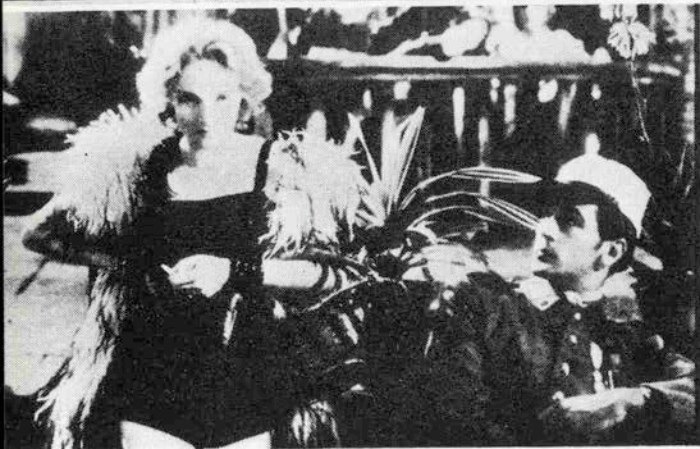
## ★新しい映画文化を



村上 和子  
△サンテレビ、  
ディレクター△

①映画の記念碑をつくらうと  
いう声が市民の間で起ったの  
は、もう随分と前のことです。  
市民運動として地道に続いて  
いたのが、昨年あたりからマ  
スコミ報道などによって、そ  
の活動が一举に知られるよう  
になりましたが、最初から見  
て来た者にとっては、本当に  
感慨深いものがあり、大いに  
拍手をおくりたい気持です。

“神戸発”といわれているも  
のはい二〇ほどあり、開港以  
来、人・物・情報が集積する  
ことにより、ある意味での  
“優越感”を神戸人はもって  
いたと思います。そこで逆説  
めきますが、今、あえて記念  
碑を建てることの“哀しさ”  
も感じています。というの  
は、今なお映画を含めて神戸  
の文化が、開港以来、隆盛を  
極めていたら、記念碑をつく



ってあえて「神戸初」を打ち出す必要はなかったのではな  
いか……。

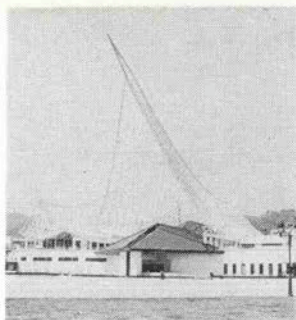
ですから、今、映画の記念碑が完成した時点で、これから何をやるかが問題になって来ると思います。この記念碑が一つのシンボルとなって、市民の生活の中に根を下ろした映画文化というものを考えて行きたいですね。

たとえば国際映画祭の開催というプラン。これは東京などでもやっており、あえて今神戸でということでもないと思います。神戸ならではの新しい形で、今までとは全く異なる切り口を映画にもてればいいのですが。造形的にも素晴らしいこの記念碑が、未来に向けた息吹きであって欲しいですね。

◎印象に残っている映画は、スピルバーグの「未知との遭遇」。暗闇の中、ハイウェイがどこまでも続く。その彼方にUFOの光が。こういうシーンです。文字通りに星が降るといふ情景。雄大さ、荘厳さを痛いほど感じる、こういうシーンを、私は昔から好きなんです。

## ・観光特集

30日に神戸海洋博物館もオープンした。  
神戸海洋博物館は、どんな



そんな神戸の、本年の目玉は、神戸港開港120年。そのお祝いのイベントが、春と秋に数多く行われます。また、メリケンパークも完成し、4月

より、海と触れあうことが出来る。海と触れあうことが出来る。海と触れあうことが出来る。

## One day KOBE

春というよりも、初夏と呼ぶのがふさわしい、5月の神戸文字通りの5月晴れに誘われ、人々は自然と脚を屋外へ向けます。

そんな季節に最もふさわしいのが、海辺であり、港です。神戸の街は、ほんの少し歩くだけで海辺

## 淡路島・四国へは

### 便利な淡路フェリー

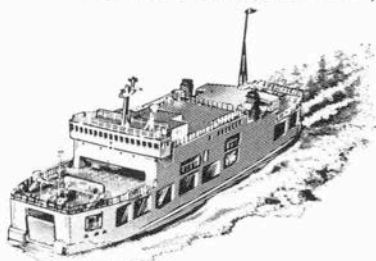
心はずむ瀬戸内の旅

胸ときめく大鳴門橋との出逢い  
京阪神・淡路・四国を結ぶ  
マリノロード

須磨港(45分)→大磯港  
六甲アイランド(85分)→大磯港(深夜便のみ)

※鳴門線は1日3便

(乗用車、バイク、旅客専用フェリー)



- JR鷹取駅～淡路フェリー須磨港間  
直行バスがあります。
- お車なしでも乗船できます。

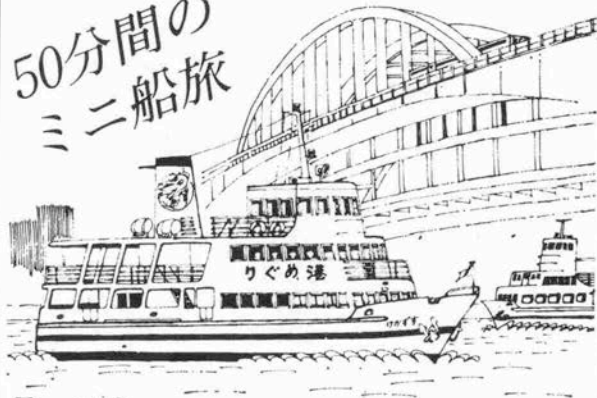
東名・名神・阪神(高速道路)⇄淡路島⇄四国に直結



## 淡路フェリーポート

予約センター ☎078(731)7421(代)  
(受付/9:00~17:00 但し日曜・祝日を除く)

## 50分間の ミニ船旅



国鉄周遊指定地

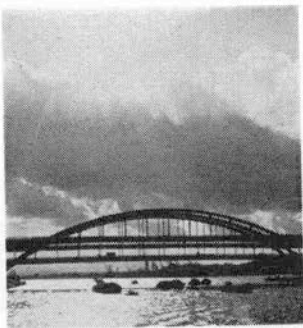
## 神戸 港めぐり

運航時刻平日10:00~16:00まで1時間毎に出航  
日・祝祭日10:00~16:30まで30分毎に出航  
(12月1日~2月末までは運航時刻が異なります)  
運賃 大人1000円 小人500円(団体割引15名以上)  
のりば 中突堤ポードタワー前(国鉄元町駅下車徒歩約10分)

## 神戸観光汽船株式会社

神戸市中央区波止場町5番2号 ☎078-391-8633

方でも楽に展示物が見学できるようにと、出来るだけ1Fのフロアを使った親切設計が



売りもの。展示内容も、最新技術を使用して大人から子供まで楽しめる。

また、隣の中突堤には、ポートタワーと港めぐりの船が待っている。季節ごとに変わる神戸の港の風景を、海から眺めるのも、神戸っ子の特権。

須磨浦海岸も、泳ぐにはちょっと早いかもしれないが、波打ち際で水と戯れるのもいい。ここで、ちょっとおすすめなのが、海釣り公園。釣りをしなくても、その先まで行って、海岸を振り返ってみると、もうそこは別世界。手軽にクルージング感覚を楽しめる。ぜひ一度、おためしを。

## 明日の海に触れてみないか

神戸開港120年を記念して4月30日、いよいよメリケンパークの海洋博物館がオープン。ミナトの新名所へぜひお来し下さい。



# 神戸海洋博物館

種別	海洋博物館	ポートタワー	海洋博物館 ポートタワー 共通券
大人(高校生以上)	500円	500円	700円
小・中学生	250円	250円	350円

神戸市中央区波止場町地先 TEL 391-6751(代)

## 須磨海づり

神戸市立公園



## 平磯海づり

(垂水)公園

ご家族づれで  
楽しい

フィッシング

レストラン神戸ワイン(平磯)  
神戸ビーフ神戸ワインを御賞味下さい

	須磨海づり公園		平磯海づり公園		
料金の種類	大人 (16歳以上)	小人 (6歳~15歳)	大人 (16歳以上)	小人 (6歳~15歳)	
つり料	基本つり料 (4時間)	1,200円	700円	1,000円	600円
	割増つり料 (1時間当り)	300円	170円	250円	150円
入園料	200円	100円	200円	100円	
海洋放牧場	1人1回 300円 (貸竿料全含 入園料別)				

■休園日 須磨海づり公園(毎週火曜日)、平磯海づり公園(毎週全曜日)

●お問い合わせ●

須磨海づり公園 ☎(078)735-2907 テレホンサービス ☎(078)732-4926  
平磯海づり公園 ☎(078)753-3973 レストラン神戸ワイン ☎(078)753-3973